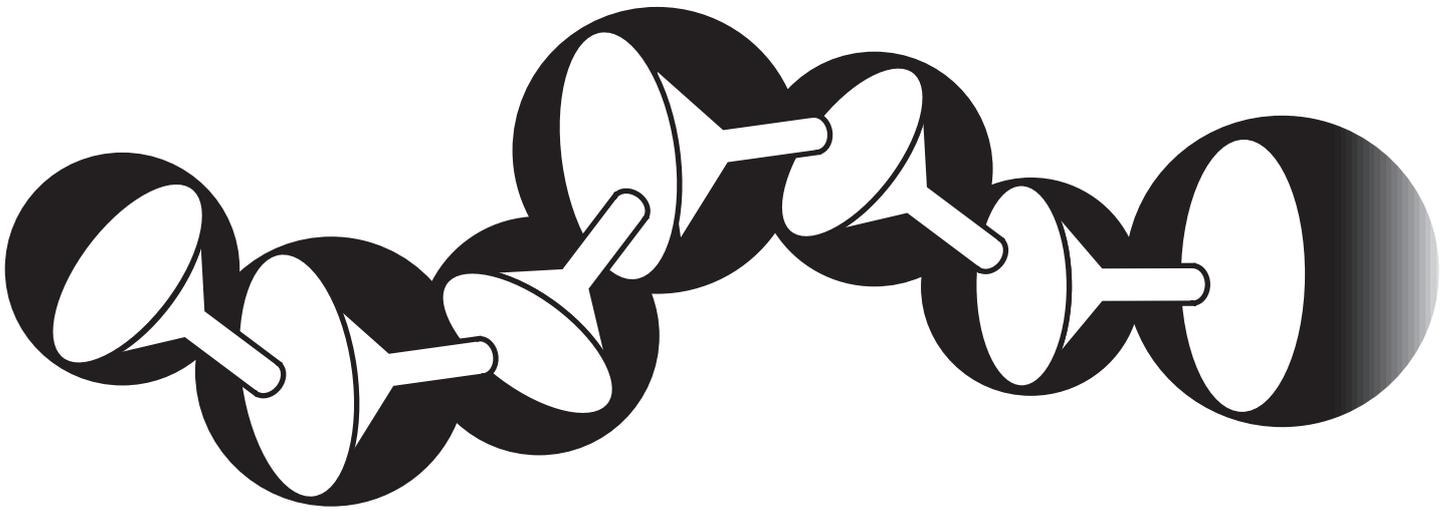


ふたつの力が人間において発現したものが「男性性」と「女性性」だとするならば、歴史の流れをこのふたつに当てはめてみることもできる。すなわち、新境地を求める欲求が強いのは男性性（≠男）であり、開拓地を住みやすくしていくのが女性性（≠女）なのだ。

こうした発想は時代に合わないものと言われるかもしれないが、私が話しているのは男性性と女性性の普遍的なモデルについてなので、考えないことにする。私は封建制・家父長制を支持するものではないけれど、男は戦士で女は子供と家庭を守るという男女の役割分担が効率的であることは否定できない。古代社会や戦時下などの極限状態で生活していくためには必要だっただろう。



現代社会において、男女の役割分担について語る時には、私たちの生活が資本主義の恩恵にあずかっていることを忘れてはならない。極限状態ではないから、多様性が出てくるのだ。女性運動も、女性の経済的自立・進出がきっかけと言われている。

しかし、大航海時代以来、資本主義の発展は常にあたらしい市場を必要としてきた。資本主義は、↑の力を強くもっていて、新境地を求めるのである。日本ではまだ戦争がきちんと終わっていないと思うが、それは倫理・心情的な問題だけでなくいつまでも戦後の↑のムードをひきずっていて、○による充実を図ってこなかったからだ。

私たちの世代が否応もなく引きずり込まれているさまざまな問題、たとえば核家族化・地域共同体の弱体化・日本人全体の共通の倫理感の消失・教育機関の経済への従属・ネット社会の到来により助長されるさらなる個人主義化・肉体性のリアリティの欠損などは、資本主義の悪い側面を検証してこなかったからだとさえ言えると思う。男女差別を考える前に、まず、資本主義のシステムの外側に足を踏み出す努力が必要だと感じる。